



5
4434
1



門 へ 5
巻 4434
1

へ 5
4434
1-6



安永れり見らみ川乃ほり
世有翁の借物の辨
侍りまらけり山とるれ屋住乃ら子の人
あまらにこのまら出るといけりれ
金糸林桂五うさだの求名よあま窮名よ
かの二ちれをまてまてまてまてまてまて
ありちりまてまてまて馬相如うまのこまあ

録事仕入

昭和九年
九月九日
購求

あはれ〜もあまき光れくをあつせ
つ〜るさうつらなるとはりよなり
ふふれ驚あ〜もあまき光れふ〜
かくう〜るふ〜人よあ〜は〜
このま〜
世智

うつら

奈良園芸

まふ〜あらの帝の市時い〜る歡喜よあつ〜
此地の名産〜あれり〜世〜其道の藝〜
〜多能〜あ〜ま〜かれよ〜
〜の外〜〜一曲〜あ〜
腰ふ〜まれ〜公界〜つら〜福ぢけ公もあ〜
とさひ〜る雲あ〜の生涯あ〜むさる〜桐の葉の家さ
求を〜さ〜のうさ〜み豆ぬの松〜宿〜人
の公よ秋風〜と〜あ〜交を〜のむ〜
乃片隅〜紙屑〜と〜あ〜と〜嵐の〜ふけ〜
地〜と〜〜られ〜冊〜と〜ある〜扇〜

我汝よ公を申すは汝我子別くもくも乃れ妹姿をある
こころよかざるもあはれ

のちよかぬは袴着る日ハやれまはるる園うね

夢花巷記

一カとの芭蕉五株の柳乃其人の徒まらされく
枯ぬ名をとくやもあるに不仕合ある枝本ある傍正の
号よ呼ぶくはおふ介の怒さくありあは切杭堀池の
名をさく流一とむ我劍冠乃仕途ふ才とをさあはる一ツの
屋家ありこれを夢花巷と名づく夢花小むつりま
いあはれと夕日紅雲の氣を公申くもくも乃れ一を
乃申ありあはれもあはれは松茸さよの夢まけとを俊成

乃れなむあはれもあつて世よといはるさぬれおうけ
あはれとさつてこころ名とせりもけ幽栖を何方の郷
よとありと山は白い海よといはあり月雪花を
四の時の詠を供し時よぬ松の夕風竹の夜雨の音まか
まへいといはるるみとあきめのあはれは珠市を出て遠
のちとく人あは杖草鞋をかくと心とをさくもく方士
まめいあはれと山と端の山やと杖を門小迷ひくあはれ
のさくあはれのを振か化されうはの山をこのるよへき人あ
あはれとさつて桃源は棹さくこころあはれと梅のあは
香もあはれとさつてよへき人あはれと今も妻入まらぬ
あはれと茅門とあはれとあり

物とさくの虫はまてあはれ夢の花

長短解

大はよく小を子 短は長ふまうとてかゝり世ふそのさへ
多うりく君を答へ人を壽くやをよむいと長濱の
露ふくくへあるハ糸の屋山の屋を引くみる八十七曲
と程ひよのさるふはくくさあうりくりの余はひく
ある小十八まけの申さけきふあへて独活の大木の讀
まのうれを矮雞のまハみーりきとあてーホルり返辞ハ
あうまにのとけー出る杭かーらうとれとほおの益多く
下手此誤議のとまりりてハ朝の柳も移りり魚あり
く女の髪こそくさくさくさあうまーをちあうま人を
一門の遠きけられ鼻れトのむひさくハ大するのお様
かかるとさく其表の温純のあうまさとあうまされを必

あうまうりくさうとあもまうとておはくは秋の表のさく
てようくむハさく難波写みーりきサハの長くさくして
よきハくくくであらあしさとと聖人も志の袂の自由
を也をけり世に式法とさくはくはくもて子合極るあ
もあれはくそのむつりき境ハ人の制も化あり天地も密屈
あうまを長短ハ自然ふさくさくす分の詮議ハあー揚粉本
ハあまに握ると程くー杓子さい櫃ハかこ手ふたはくは
下さゆのおあうと天理のまあうとくさくは我友田氏
さくはかりとちの強れつとに煙管を握れりとの短き
くと堂にくくはへー我ハ秋西郊ハあうまありて
調字をあらく長きにまきねり是とくらハくさくはくは
久くして遠をさくさく申くハ冊山よ書を吹あう時ハ

神子あさひ張子うらをききよきとらうりてくくくくくくくくくくくくくくくく
感ありつあふき程の解をうりてとととむらよの詞井
かよ其辞のきとらうらまて才のみうらおあり

本履説

本履くくきハ東坡うきの母けの尻ふちうきおあり
へきんあふや汝ハ友の日の宰予う杖ふも産られさる日わ
つきて障形の時ハ椽の下ハ膝ころい其黄のきお取よとも
あひ又ハ衣の杖ふきとらうりてはの御ふあつきてハ
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
きめき手にひさゆつきは澄の日のくくくくくくくくくくくく

よりくくの交ハきとらうりてくくくくくくくくくくくくくくくく
苗とありてハ尻ふちうきくくくくくくくくくくくくくくくく
と断るハ罪ありきハの果あれと備も下結もあふハ本の
まひく例の一体のきりハ遠くくくくくくくくくくくくくくくく
ひきれん抑きとらうりてハのき復き結とらうりてハ
低きと下結といハハいつれ一体をきりてくくくくくくく
差別ハあふくハ俳諧のくくくくくくくくくくくくくくくく
あふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

鳥羽繪巻

蝦蟇の息は虹と起し一層ハよく樓臺と吐後申の虫

とぞへーかへにうらなをのま姫とはなりけるれを
柏木のちまつも似そ松木のあうら夕一ま男あうらう
かしまりあき舞そののゆあうあれも女もらよ暮も
形く明くれりそし記つとあもねりーをまうまうて
とうく白ちへのをいそくまて糊米のまあれぬ中を
祈ひあまうさーとちまうりるまの比せういとい
ーあのこ六捨のきれあ目細まうの婆やさーまう昔ハ
佛跡まういらの名あも呼まうーあうーあうのあ
あう時ハ走あのゆれこういぬうちあうとよまのりまれ
目ふかまうーうりまうもゆまき侍まの中まうー
あき同緒の口さー出杵子の曲りをよりうまをまあ
地獄さく仲ま破まうーまけられ茶谷令にまへられ
あらぬやこまいあうーのうて面とあううあうい
こけけー才まあく物の表さこまあまて買臣ま妻乃
うるまきをまを中解ーまある收角のあうまれ
ふ棚の端より才を投げるゆを表さこけけ接ーまあ
ままの婆まうりるうてい合れ物のつとち叶り
あうーの怒うまうーく石漆の妙薬まう及まて妹嗜
の中も引まうま内をまて下られれも程まみれ
おくハ雨かりの夜まうまあまうー長門の涙うく
隙形くこまあまうりあーくありて井戸福まこら
うり生夢津ふ埋まうく後うれ表ま人まうり
ーふりー形くまうまうまうりつり響の中のまも

今申く比あらんるちうた寺の門者よりうれをん
初屋ふかくちうれあうちうりぬ火神よさぬさう、
海をあうち茶をさるるーとこーーとこふうたの刃(カ)
ゆやままぬお梅もちうくまきまきた火もらひえと
ちうい灰をさくちうけられ唐うらーとこふうたの刃と梅
られーちうま目あうさうあうはあへきさされた
秋のいろもさうつちう梅つちの壘塚よさうねやー
果はさるあきまき初のまこーとこいんさうさう初あう
園の表の礫とふちうりるるとこ

氏陽官邸記

百里の海山きりあうとこあうる目かこつた二年乃

起卦りと表は物のすこるゆきまきーとこあうあまよと
とちうは都の月とさー入と梅をよきとあまよとさう
みちありるはあまさうりのあまよちうた調度ともうこ
つけく常の君ふよ定めつ唐ハ二之間ま定まあうと
乃陽とさうまきとこつちうあまに詠梅とさう
一ちこのつと^{石葉}二ちこのつー花ハ時色とくまきまつやま
我いのと表あうとさうと梅とさうとちうた乃
あまさうとさうまきとさうとちうたあまらうる初れ
風冷ふ夏山のまきーとさうと梅とさうとちうたあまらうと
初ー梅子のたうちうあまらうとさうとちうたあまらうと
夕暮あうとさうとさうハかの初平の漢磨の初初とさうと
とちうとさうとさうとさうの松風とさうと吹あうとさうと

こゝろにうしろのうしろの西ありの二階窓を居
るちりく指さしあらしくきらびきりまれと富士ハ
木の石にらまきくかきくを根をうみこして時
あつたををあつた子常子を形をうなる申すくまれは
きりあつた念佛題目代待代ありあつた木魚のひき
歯子指をの佛子あひく建立まぬのひきく
比丘尼の赤坂よりれ情をきくうのきれうのさき踏
を引つせ過君ハ白きく顔をかれくもぬくひは
よりをみくれと心の動へくもあつた隣ハ二階の壁
をうく朝の火打の音のくより指す子実味日也
たごきき日をつきくもる紙帳子園れ居るあつた
まてはらうに物のうききりかこもる又らぬるく

ありうらるるへ一日数うるまに居者くわく正徳も
かゝる程よとくくを柱く紅の秋と涼庭切子刀言
き遠くを塵塚よ夢をきくく飾賣の夢とくあつた
るくく不自他のくくを商人くく経と艾乃
底よ忍をもほは味噌桶の似せ路とち付由門のききと
のくくサ泥系結々忠とく守り煮豆和物子朝夕の飯
時とかんく雨のあつたハ火煮るうとくあつた
飯おのさゆりるるされとあつた雪とあつた煤拂
のやあつたくくよとくく乃戸一枚あつたくく世ハ
あつたくくりるるをやとくくもくくも何人の公はて
家ハ故々の形とくくらんとけを額子懸くくとい
あつた人も真一とくく

乃をききよとあまの大神のかよのちき鑑もたのしうよ時流
うらへーを以佛ののからぬぬる比つゝる終をよまら
ちきもあつても沼の名のよあつておとあつて鑑ハ新の
りよのく野走はあつて鑑の世界をあけてあけてもりよ
へうのよこれよよりあれて詩人の沼のよ友よよよよ
く事杜々よよも鑑の沙流はあつてと友のあつて鑑ハ
よハ劉伯倫のよあつても友の鑑はあつてもよ
母俳諧の趣向をわけて我門よハ上戸もあつてよ
程さつてよ

鬼傳

むーハ佛のよよ作ー金刺さあつてみー科まう天と

穿人の流よりうてとらうとくとらうとくと鬼七十八のあつて
をより楊朱のの松よあつてのよと流のよとらうとらうとらうとらうと
かつて鑑のよもあつてよとや十命のよもあつてよとらうとらうとらうと
よ代つてみとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
よつたつてよとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
奴のけ者の情あつて大早うららぬのよあつてもあつて
よよのよよよあつてよとくとくとくとくとくとくとく
芥川のよよよあつてよとくとくとくとくとくとくとく
よれのよあつてよとくとくとくとくとくとくとく
世にさつてあつてよとくとくとくとくとくとくとく
世上お躍するよとくとくとくとくとくとくとく
節終の真

そりたるり出されつあしあき皇の進致うあしつ海女婆あ
しとま心さうまて冥途の出かりしあきまきしし佛の心
みあ起りし一夜の似あめあひうれつさうまきしし非う
業れ祥月とあひひ谷れ火のしき加減ささくし何責乃
あうけりし獄卒とよまきし地獄の六尺とさうりしお
しと痛しれさう天下とさうりてる民素平と福公丹後
丹波の境ある城はちね風すふしく安達う系のお城も
子花くしとてし人あきれし今く棟瓦子付とのに
大津徐にさうりしとて下戸と思ふふあき世とさうり

胡麻辞

神傳佛のあさめくさる中子しししに胡麻あつしと

よりしし十毒聖のさうし世しりし帝の生羅のしとて
さうてお麻をよとのあしとてりさきしとて新しと
さうりしとたはしあきせられさうとてし明申く経
しとてしりし唐帝のまねを獲しとてし飯時
さうれまひしししとてあきまのあほ子あつしとて
あしとてれあしとてあきとてしとて胡麻のあきとてし
さうりしとてあきとてあきしとてあきとてあきとて
さられせしとてあきとてあきとてあきとてあきとて
乃きあしとてしとてあきとてあきとてあきとてあきと
あきとてあきとてあきとてあきとてあきとてあきと
も麻とてあきとてあきとてあきとてあきとてあきと
はしとてあきとてあきとてあきとてあきとてあきと

同菊辞

枯きくー 菊れそのつーは瘦よのつーまのまら
赤きくーあうー向きくーあうー菊あり今や世と
のちあまか づれく菊ようさされ世尺よあて
ら世花ハ年くよあうーあうー今や世と人よと
似像とらうあいのうま菊ーの甲にうられま
奥州とあま印まてをよあうあ人よあてー世あて
る菊よ起すんくーいされとーまのまらあ
りくーくーあうーあうーあうーまのまら
彭祖を益すくあてハる菊の齡よーあちん成
種よあうー十万縁の敵とあひく片癡人ハくあ
このみあうーあうーあうーあうーあうーあうー

くうあやまきくー菊よくうまあうーあうーあ
あうーあうーあうーあうーあうーあうーあ
あうーあうーあうーあうーあうーあうーあ
あうーあうーあうーあうーあうーあうーあ
あうーあうーあうーあうーあうーあうーあ

我菊や尺より山にぬまにかさす

俳序と接

一 飯ハく名れ接函さるー

茶の花の比をちる茶の葉を花

一 け一つ葉一つ函の者と一つはけりく 弊子様をさ乃
あをのうとーあいふあをを引ひ屋敷ハ之季あ母
くさるー一季のおハ端らるにーく

とよりりるをけりの大おハ大きにけおまけりきく
おらさの善人と云せりるより世ハあまハの善人も
よふりまなむされけりこのかハの善人もあり
うーい善人もあはしやあま

疾くや樂起てや安きまは行

後辨

帝々のおの宝あ廿一年のまとはり一富士二智
乃正定もこまけりおおのありめて唐人の耳ハ
日本人の疾言あにーされもあれ得失をまよりの
邯鄲の枕ハああり古れとまにいつは城とありき
速園子ハあれ城にひくまて櫻園ハあまよーき

雲北上人ハま玉のおの衣とくーハ限りて乃高
ともいへらしあまうまれ神もかきらけま
んまぬ神も七百満るらけこの枕上ハあま
+せあなるかろまうままれ昔は佛ハいあれ
例の世とまあまてま初泡氣のこことより人ハ
神もまはれま入て世中とらあててま
ともま現のありまのあはまを初れまへ入
と起まのーと初くまのまて十年の月日を
らるも百年の算刊ハあまへまをや鬼神ハ
形ハ似城ままて形ハ聖人もま形ハまいつの
世ハ誰か定やまを鬼神ハまてまの似城ま
まて後らるま聖人もま何まもま

さるる冷きも熱きもあはれなるらん
あはれなるらんあはれなるらん
あはれなるらんあはれなるらん

あはれなるらんあはれなるらん
あはれなるらんあはれなるらん
あはれなるらんあはれなるらん
あはれなるらんあはれなるらん
あはれなるらんあはれなるらん
あはれなるらんあはれなるらん
あはれなるらんあはれなるらん
あはれなるらんあはれなるらん
あはれなるらんあはれなるらん
あはれなるらんあはれなるらん



六冊中三冊ノ本一冊ヲ示ス

